



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	不安定な女性アスリート : 女子サッカー界の制度をめぐる一考察
Author(s)	申, 恩真
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 134, 17-42
Issue Date	2019-06-27
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.134.17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75119
Type	departmental bulletin paper
File Information	05-1882-1669-134.pdf



不安定な女性アスリート

—女子サッカー界の制度をめぐる—考察—

申 恩 真*

【目 次】

- 1 はじめに
 - 2 日本女子サッカーリーグの誕生：女子サッカーとジェンダー・セクシュアリティ
 - 3 日本女子サッカーリーグの変遷過程
 - 3-1 第一期：1989～2003——1部制
 - (1) リーグの成長期と好況期：1989～1996
 - (2) リーグの不況期：1997～2003
 - 3-2 第二期：2004～2014——2部制
 - 3-3 第三期：2015～2018——3部制
 - 4 リーグ拡張によるチームの運営難
 - 4-1 現場レベルの経済的困難をめぐる
 - (1) チームの運営資金不足の実態
 - (2) 選手の生活上の不安定性
 - 4-2 トップダウン方式のリーグ拡張とチームの運営方法
 - 5 おわりに
- 注
参考文献
参考資料
【キーワード】 リーグ拡張, チームの運営難, 不安定性, 日本女子サッカー

1 はじめに

本稿の目的は、日本の女子サッカーリーグ（以下、リーグ）を歴史化することで、リーグ拡張と現場レベルの困難との関係性を明らかにすることである。本稿では、制度レベルの変容過程において現場の実態を意識しようとする作業がいかに重要であることを示唆し、そこに表れている日本女子サッカーの特性について解明する。

リーグが1989年に創設された当時、加盟チーム数は6チームであったが、2019年には32チームと増加した。このように、リーグ誕生から31年目を迎えた現在、競技人口やチーム数は量的な発展を遂げている。他方で、本稿で考察したいのは、こうした加盟チーム数の量的な増加という結果を、果たして女子サッカーの発展として捉えることができるかどうかである。

* 北海道大学大学院教育学研究院博士後期課程
DOI: 10.14943/b.edu.134.17

つまり、リーグが拡張され、対外的な事業規模が幅広くなったのが、現場レベルのチームや選手にどのように解釈されているのかについて考えたい。なぜなら、現場レベルでは、チームの運営難や選手の競技環境、低賃金に関する議論が継続的になされているからである〔朝日新聞, 1993.12.16・1999.04.09；東明ら, 2003；読売新聞, 2009.05.13；輪田ら2013；Edwards, 2014〕。なぜリーグ自体は発展しているかのように思えるものの、現場レベルの経済的困難に関して、すなわち女子サッカーの脆弱性その実態への議論は相次いでいるのだろうか。

したがって本稿では、女子サッカーに関する文献や新聞記事、大会プログラム、機関誌などのメディア資料をもとにして、リーグ制度について概況し、また、リーグ事務局が女子サッカーの普及と発展のために取り組んできた事業内容を取り上げ、それらを歴史化していく。これらの作業を通して、リーグ運営方法が現場へどのような変化をもたらしたのか、現場の立場から論じることを試みたい。

2 日本女子サッカーリーグの誕生：女子サッカーとジェンダー・セクシュアリティ

まず、リーグが創設される以前の女子サッカーの歩みについて説明しよう。初めて女性が日本サッカー協会（以下、協会）に登録可能になったのは、「日本女子サッカー連盟」が協会の傘下組織として設けられた1979年からである。その登録チーム数は52チームであって、登録個人選手数は919^①名であった。こうした組織的な働きのもとで、翌年の1980年からは、第1回全日本女子サッカー選手権（現、皇后杯・以下、全日本選手権）という大会が開かれることになった。この時から競技スポーツとしての女子サッカーの普及と育成がスタートしたと見られる〔日本サッカー協会75年史編集委員会, 1996：170-179〕。

その後、1981年には初の女子代表チーム（以下、女子代表）が結成された。初の女子代表は同年の6月に、香港で開かれた第4回目のAFC女子選手権（現、AFC女子アジアカップ）に参加し、初めて国際舞台にて試合をおこなった。それから1988年頃、女子サッカーが1990年北京アジア大会より正式種目になることが決まったため、この時期から日本オリンピック委員会や協会は、女子代表の強化を目論んでリーグ発足へ取り組み始めた〔竹本, 2000：4〕。その結果、1989年より、全国レベルの女子サッカーリーグが全日本選手権に参加していた6チームを中心に構成され、同年の9月にリーグが開幕された。なお、既存の日本女子サッカー連盟は「日本サッカー協会第5種委員会」へと変更となった。リーグが創設されることと並行して組織づくりがおこなわれたように、日本における女子サッカーの発展への様々な働きが1980年代からスタートされたと思われる。

ここで、リーグ創設当時の「ジェンダー化される女子サッカー」についても考えてみたい。サッカーをする女性の身体が社会的にどのように捉えられているのか、どのような眼差しが採用されていたのだろうか。これを明らかにするために、過去的女子サッカー競技規定とリーグの英語表記について確認したい。このことから、女子サッカーにおける性の二重規範を指摘することができると思われる。

まず、過去的女子サッカーの競技規定の側面から検討してみると、全日本女子選手権が開催され始めた時期から、女子サッカーと男子サッカーとの競技規定は異なっていた（表1）。第1回目の全日本女子選手権は、11人制ではなく8人制でおこなわれた。また、サッカーボー

ルは小学生用の4号球が公式球として使用されていた。さらに、試合時間も成人男子と違って90分ではなく50分であった。ピッチも正規の3分の2の広さであった。それ以来、全日本女子選手権の競技規定は徐々に変化し、男子サッカーの競技規定と同様になっていった。たとえば、1982年の大会からは11人制がおこなわれ始め、1986年には5号球のサッカーボールが使用されることになった。試合時間も、1989年からは1回戦から準々決勝までは30分ハーフの60分間へ、準決勝以降の試合は40分ハーフの80分へと変更された。そして、同年に創設された日本女子サッカーリーグも、全日本女子選手権をもとにして誕生したものであるため、試合時間は全日本女子選手権と同じく80分であった。リーグで90分の試合がおこなわれ始めたのは、1995年の第7回目からであった。

表1. 女子サッカーの競技規定の変容過程

年度	大会名	大会規定における特徴
1980	第1回全日本女子サッカー選手権大会	ボール4号球使用
		8人制
		ピッチ正規の3分の2の広さ
		試合時間50分
1982	第3回全日本女子サッカー選手権大会	ボール4号球使用
		11人制
		試合時間50分
1983	第4回全日本女子サッカー選手権大会	ボール4号球使用
		11人制
		試合時間60分
1986	第7回全日本女子サッカー選手権大会	ボール5号球使用
		11人制
		1回戦～準決勝の試合時間60分
		決勝の試合時間80分
1989	第10回全日本女子サッカー選手権大会	ボール5号球使用
		11人制
		1回戦～準々決勝の試合時間60分
		準決勝以降の試合時間80分
	第1回日本女子サッカーリーグ	ボール5号球使用
		11人制
1995	第7回日本女子サッカーリーグ	試合時間80分
		ボール5号球使用
		11人制
		試合時間90分

※日本女子サッカーリーグ, 1989・1992・1996；大住・大原, 2004；高藤, 2017 参考

こうした競技規定の歴史は、女子サッカーに「男の眼差し」が採用されている点を浮き彫りにする。なぜなら、同じ種目名であっても、男子と女子の競技規定が異なる自体が、性別によってスポーツする身体が区分されている点を意味するからである。つまり、異なる競技規定が存在したその背景には、サッカーに不向きな女性の身体という見方が隠れているのである。さらに、女子サッカーは男子サッカーより狭いピッチで試合が実施され、競技時間も短かった点などから、女性より身体的に優位にある男性というジェンダー規範も生み出していた。現在は、競技規定における男女差が解消されている。しかし、そうだとはいえ、性によって設けられた競技規定があった事実自体が、女性がおこなうサッカーする身体には限界があ

るように、女子選手や人びとに認識させてしまうことになるだろう。この点は、身体的にさらなる成長の可能性をもつ女子選手たちの能力を抑制することになりかねない。

次に、リーグの英語表記を確認することで、当時の女子サッカーには美しさ、セクシーのような「女らしさ」というジェンダーが組み込まれていた点も指摘しておきたい。第1回リーグの英語表記は、「Japan Women's Football League」ではなく「Japan Ladies Soccer League」であった^②。ここで「Woman」と「Lady」の違いを原義より確認すると、Womanは「女の人」、Ladyは「パンをこねる人→妻→女性」である。現在、「Womanは成人の女性を表す一般的な語」であり、「Lady」は「イギリスではかつて貴族夫人・上流階級の女性に用いたが、今日ではイギリスでもアメリカと同様、女性に丁寧に接する場合、誰にでも用いる」語として用いられている^③。ところで、両方とも女性を表す言葉として似ているように思われるが、Ladyの方が貴婦人、淑女（⇔gentleman）、男性の異性的対象としての女性へ接する、という意味が含まれている点が捉えられる。つまり、このリーグの英語表記のように、女子サッカーが異性愛対象として扱われており、そのことが女子サッカーに根差していると考えられる。女子サッカー選手の身体がどのようにイメージ化されていたかが、リーグの大会プログラムの表紙からも裏付けられる。



図1. 日本女子サッカーリーグ・大会プログラムの表紙（1989年～1996年）

以上のように、女子サッカーには、男性からみる異性愛対象としてのセクシュアリティも関連している点がうかがえる。また、男子サッカー（成人）とは異なる競技規定が定められていた点から、女子サッカーにおける軟弱な女性の身体性が、根強く認識されていた。つまり女性は、サッカーという体力を要する競技スポーツをおこなうことにおいて、男性より身体能力が劣っており、ひ弱くてセクシーなものとして見なされていたのである。これらのこ

とで、サッカーという種目には「サッカーする身体への性別二分制」という考え方が組み込まれている点が明らかになる。すなわち、日本の女子サッカーとは、男の眼差しが採用されたうえで、普及や育成が推進されてきた種目であり、ジェンダー化が見られるスポーツのひとつとして捉えられるといえる。

3 日本女子サッカーリーグの変遷過程

以下では、こうした女子サッカーがどのように展開されてきたのか、リーグの変遷過程に焦点を当てて歴史化する。リーグが創設された1989年度から最後のシーズ終了時点である2018年度までのリーグ体制を、下部リーグの発足時を軸に三期に分け、経時的にまとめていく。

3-1 第一期：1989～2003——1部制

第一期では、1989年から1996年までを「リーグの成長期・好況期」、1997年から2003年までを「リーグの不況期」と呼ぶことにする。

(1) リーグの成長期と好況期：1989～1996

1989年のリーグが創設された時期の加盟チームは6チームであった。リーグ創設時のチーム名を紹介すると、「読売サッカークラブ女子・ベレーザ」「田崎真珠神戸フットボールクラブ・レディース」「日産FCレディース」「新光精工FCクレール」「プリマハム・FC・くノ一」「清水フットボールクラブ」というチームである。その後、3シーズン目を迎える1991年からは、4チームがリーグに新加入することになり、計10チームがリーグ優勝を争うようになった。

リーグの成長期では、1992年から下位リーグとして「JLSLチャレンジリーグ」が発足され、トップリーグと入れ替え戦もおこなわれた。また、リーグ形式も総当たり戦となった。翌年の1993年からは「前期リーグ（第1節～第9節）」と「後期リーグ（第10節～第18節）」に分けられ、それぞれのリーグでの優勝チームが「リーグ優勝決定戦」に挑戦できる形式が設けられた。

1994年の後期リーグからは、リーグの愛称が「Lリーグ」と名付けられた^④。この影響で女子リーグも「JLSL」より「Lリーグ」と愛称が変わった。同年の1994にはリーグ公式テーマソングが、翌年には加盟10チームのイメージソングも発表された〔日本女子サッカーリーグ、1996〕。1995年の第7回リーグからは、第2回FIFA女子世界選手権（スウェーデン）の試合時間に合わせて、リーグの試合時間も80分から90分となった〔大住・大原、2004〕。

こうしてリーグは徐々に成長していき、好況期とも呼べるほどの繁栄していった。そのため、この時期においては、「他の国のどの女子リーグよりも恵まれた報酬が得られる」ため、「アメリカ、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、オーストラリア、中国などの主力クラスが続々と来日」〔野田、1995：10〕し、リーグの競技力も高まっていった。さらに、1995年には、女子代表が第2回FIFA女子世界選手権（スウェーデン）にてベスト8進出を果たし、1996年第26回アトランタオリンピック（アメリカ）から女子サッカーが正式種目として採用されることで、協会やリーグ事務局も女子代表をバックアップすることに力を注ぐようになった〔日本女子サッカーリーグ、1996〕。その後、女子代表はアトランタオリンピック出場権を獲得した以来、女子サッカーがメディアでより多く取り上げられ、彼女らの試合がテレビで放

送されるようになった〔大住・大原, 2004〕。そして, 同年度に, 初のリーグカップ戦「OKI Lリーグカップ96」も開催された。

とりわけ, この時期の加盟チームは, 大型企業から資金を援助されるものが多かった。つまり, 実業団チームとして活動していたチームがほとんどであった。プロ選手や国から援助を受けるアマチュア選手もいた〔Hong, 2012; 輪田ら, 2012a; Edwards, 2014〕。当時のリーグや各チームは財政面においても豊かで, 選手がサッカーだけで生計を立てることができる世界唯一のリーグであった。それゆえ, 世界各国からトップレベルの選手が日本に集まり, 外国籍選手30人ほどが協会に登録されていた〔田口, 2009〕。それがチームの戦力アップにもつながったため, この時期のリーグは, 日本の女子サッカー全体のレベルアップや将来性を担っているものとして, 女子サッカーに興味のある人びとに期待をもたらした。

(2) リーグの不況期：1997～2003

しかしながら, 女子代表はアトランタオリンピックにて予選敗退してしまった。その結果, オリンピック以前の女子サッカーへの注目度は一時的なものに過ぎず, 女子サッカーブームを起こすものを作り出すことができなかった。そのため, リーグ事務局は, リーグ自体や女子サッカーへの認知度を上げるために, 1997年度のリーグからは従来にも増して女子サッカーの発展へ再跳躍しようとした。

表2. リーグの加盟チーム数

年度	回数	チーム数
↓1部制		
1989	第1回	6
1990	第2回	6
1991	第3回	10
1992	第4回	10
1993	第5回	10
1994	第6回	10
1995	第7回	10
1996	第8回	10
1997	第9回	10
1998	第10回	10
1999	第11回	8
2000	第12回	9
2001	第13回	10
2002	第14回	11
2003	第15回	13

年度	回数	チーム数
↓2部制		
2004	第16回	L1: 8
		L2: 6
2005	第17回	L1: 8
		L2: 7
2006	第18回	D1: 8
		D2: 8
2007	第19回	D1: 8
		D2: 8
2008	第20回	D1: 8
		D2: 9
2009	第21回	D1: 8
		D2: 8
2010	第22回	な: 10
		チャ: 12
2011	第23回	な: 9
		チャ: 12
2012	第24回	な: 10
		チャ: 12
2013	第25回	な: 10
		チャ: 16
2014	第26回	な: 10
		チャ: 16

年度	回数	チーム数
↓3部制		
2015	第27回	な1: 10
		な2: 10 チャ: 12
2016	第28回	な1: 10
		な2: 10 チャ: 12
2017	第29回	な1: 10
		な2: 10 チャ: 12
2018	第30回	な1: 10
		な2: 10 チャ: 12

- ・L1: Lリーグ1部
- ・L2: Lリーグ2部
- ・D1: Division1
- ・D2: Division2
- ・な: なでしこリーグ
- ・な1: なでしこリーグ1部
- ・な2: なでしこリーグ2部
- ・チャ: チャレンジリーグ

ところが, この時期はバブル崩壊により, 女子サッカーにかかわっている多くの企業が経済危機に苦難していたため, 1998年度の1シーズンの内に, 4つの企業が女子サッカーチームの廃部を発表し, リーグから退会してしまった。このことで, 翌年度からリーグを開幕できるかどうかという, リーグ存続自体が危うくなっていた。こうした中, リーグ事務局は全国レベルのリーグを維持していくため, 「日本体育大学女子サッカー部（現, 日体大FIELDS横

浜)」と「浦和レイナスFC（現、浦和レッドダイヤモンズ・レディース）」を加盟チームとして承認し、1999年のリーグを8チームで開幕することにした。しかしながら、再び1999年度に3つの企業チーム、「松下電器パナソニックバンビーナ」「OKI FC Winds」「プリマハム・FC・くノ一」が退会してしまった。そのうち、「松下電器パナソニックバンビーナ」はクラブチームへ移管して「スペランツァ F.C.高槻」というチームとしてリーグに残り、同様に「プリマハム・FC・くノ一」も「伊賀フットボールクラブくノ一」へ移管してチームを運営することになった。

だが、残された加盟チームだからといって、豊かな財政で運営していたわけではない。そのチームらも、経済的に運営難の中でリーグに残っていたのである。そのため、リーグ事務局は「チーム数減少を食い止めるため、リーグへの参入基準を下げ、とにかくリーグに加盟してくれるチームを探すという姿勢で新加盟チームを募る方法を取り」〔田口, 2009: 12〕, リーグ戦の形式や規定などを変更した。たとえば、1999年からは残された加盟チームらの、互いの戦力を均等に保つため、外国籍選手の登録を認めないという規定を定めた〔田口, 2009〕。次に、2000年からは、各チームの遠征費削減を目指して、東地域と西地域に分けて「1次リーグ」を実施し、その結果によって「決勝リーグ」と「下位リーグ」に分かれてリーグ戦をおこなうことにした。また、有料試合から無料試合に変更することで、各チームの会場使用料への負担を減らし〔輪田ら, 2012a: 21〕, リーグの分担金を735万円から150万円と下げた〔読売新聞, 1999.11.12〕。さらにリーグ事務局自体も縮小させ、最低限の資源でリーグを運営し続けた。これに加えて、加盟チームの運営体制の多様性を許可し、とにかく財政能力のあるチームをリーグに加盟させ、全国レベルのこのリーグを維持しようとした。その結果、2003年第13回リーグでは、加盟チーム数を1999年の8チームより13チームに増やすことができた。

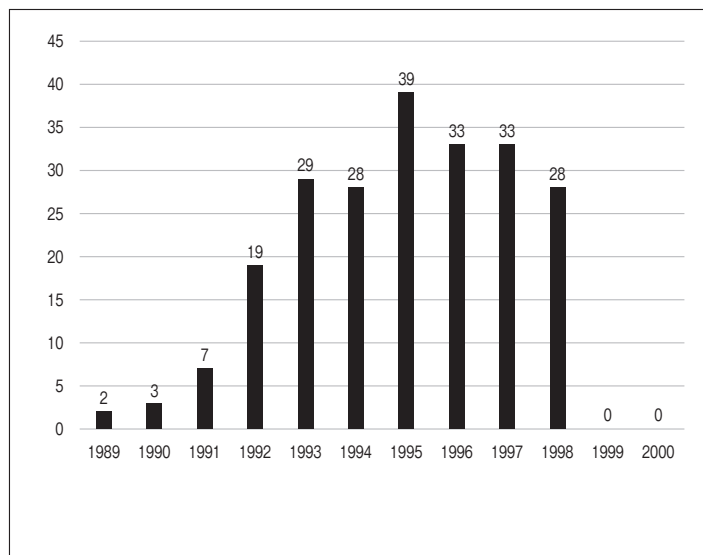


図2. 外国籍選手の登録数の推移〔田口, 2009より〕

3-2 第二期：2004～2014——2部制

こうした紆余曲折の中、女子代表の国際大会にての活躍は、女子サッカー界に明るい話題を提供してくれるものとして、女子サッカー関係者に期待されていた〔日本女子サッカーリーグ、2001〕。ところで、女子代表は1999年の第12回AFC女子選手権（フィリピン）にてベスト4の好成績をあげた以来、同年にアメリカで開かれた第3回FIFA女子ワールドカップではグループリーグ敗退を、また2000年の第27回シドニーオリンピック（オーストラリア）への出場権も獲得できなかった。2003年の第4回FIFA女子ワールドカップ（アメリカ）でもグループリーグ敗退してしまい、女子サッカーへの認知度アップを図ることができなかった。ここで、リーグ事務局は、女子サッカー界の活性化につながるよう、女子代表が好成績をあげることを悲願しつつ、2004年の第16回リーグから「Lリーグ1部：L1」、「Lリーグ2部：L2」といった2部体制にリーグ拡張をおこなった〔鈴木、2004（123）〕。

このように、リーグ事務局はリーグを拡張しつつ、女子サッカー界の新たな展開を目論んだ。例を挙げると、Lリーグというリーグの略称を「なでしこリーグ」に愛称を変更した点を取り上げられる。第28回アテネオリンピックの出場前、女子代表のメダル獲得への期待や応援の気持ちを込めて、女子代表に「なでしこジャパン[®]」という愛称が名付けられた〔日本女子サッカーリーグ、2004（130）〕。それから、女子サッカーが正式種目となった1996年アトランタオリンピック以来、初めて女子代表が予選を突破し、ベスト8進出も果たすうえで、フェアプレー賞も受賞した。「この活躍により、再び国内で女子サッカーの人气が高まりを見せた」〔日本サッカー協会、2011：15〕ということで、同年の9月にリーグの愛称が「なでしこリーグ」に決定された。それ以来、日本の女子サッカーリーグは「なでしこリーグ」と呼ばれるようになった。

その後、2006年の第18回リーグでは、リーグのオフィシャルスポンサーが株式会社モックと変わり、リーグ新しく3年契約が結ばれた。既存のLリーグ1部は「Division1」に、Lリーグ2部は「Division2」にリーグが再編成された。リーグ事務局は、リーグ再編成を通して各チームの優勝争いを激化し、それを女子サッカー界の成長につなげようとする目的を設定した。ところが、モックは契約期間3年を打ち切り、2年でオフィシャルスポンサーから撤退してしまった。翌年度から、新しく株式会社プレナス（Plenus）がオフィシャルスポンサーとして決まり、「プレナスなでしこリーグ」が再出発されることとなった。

そして、女子代表が2008年第29回北京オリンピック（中国）において、過去最高4位となり、女子代表の記念品ができるほど、女子サッカーは人びとの期待を寄せることになった〔読売新聞、2008.09.12〕。このこともあって、同年の11月、リーグの総務主事により2009年から5か年計画で進める「リーグ改革」が以下の内容で発表された。「1・2部各8クラブのリーグを、2013年にはトップリーグの『なでしこ』（12クラブ）と、『チャレンジ』（東西計16クラブ）に拡充……『なでしこ』と『チャレンジ』、地域リーグの間で入れ替え戦を行い、ピラミッド型の組織を明確にすることで競技力の向上を目指す。また、リーグや加盟全チームの法人化、なでしこリーグ全試合を有料化する」〔読売新聞、2008.11.08〕といった改革であった。これは、「①女子サッカーの競技力向上、②リーグ運営力強化、③女子サッカーの普及活動」〔輪田ら、2012a：23〕など、女子代表の活躍につれ更なる女子サッカーの発展とリーグの充実さを目指すためであった。

この改革の通り、2010年から、リーグ1部は「Division1」より「なでしこリーグ」に変わり、

10チームで構成された。2部の方は12チームの構成で、「Division2」より「チャレンジリーグ(EAST／WEST)」に変更となり、全体的なリーグ改革が進んだ〔読売新聞, 2010.01.22〕。とくに、リーグ事務局は、チャレンジリーグではトップレベルに相応する私立高校や私立大学を加盟できるように加盟基準を設け、トップリーグと地域リーグを連携させようとした〔輪田ら, 2012a：21-23〕。さらに、2011年4月1日より、リーグ運営力強化のため、任意団体であった女子サッカー組織を一般社団法人化へ移行した〔読売新聞, 2011.03.03；輪田ら, 2012a〕。

2012年に入ると、リーグ事務局の新事業が打ち出された。それは「チームスタッフ雇用助成事業」を実施し、200万円をなでしこリーグに所属する10チームへ援助するということがあった。この狙いは、チームが選手をスタッフとして雇用して、選手が女子サッカーの普及やチーム内の活動に専念できるようにするためであった。さらに、リーグの優勝チームに限って500万円の補償金が支給されていたが、2012年のシーズンからは2位のチームにも300万円、3位のチームにも100万円の賞金が支払われた〔読売新聞, 2012.03.23〕。また、新人セミナーも開かれ、「マナーや望ましい取材対応、食育、ケガや結婚など転機への対処法」の講義もおこなわれた〔読売新聞, 2012.05.24〕。

その後、リーグ事務局は2013年のチャレンジリーグの加盟チーム数を16チームと増加させた。また、2014年の第26回なでしこリーグにおいて、各チームが終盤まで優勝争いをおこなうよう、「シーズン途中から上位と下位の2リーグに分ける『スプリット(分割)』方式」に変えることを発表した^⑥〔読売新聞, 2013.11.13〕。それと同時に、「U-15なでしこアカデミーカップ」も開催され始め、選手の育成へさらなる力を入れようとした。このように、リーグ事務局は女子サッカーの普及と発展を目論むということで、リーグの加盟チーム枠を増やしていった。

そうした中、女子代表が2011年第6回FIFA女子ワールドカップ(ドイツ)において初優勝したことで、メディアでは女子サッカーが多く取り上げられ、国内での女子サッカーへの認知度が高まった。彼女らの好成績は、日本政府により「初優勝という偉業を成し遂げ、最後まで諦めないひたむきな姿勢によって、国民にさわやかな感動と、困難に立ち向かう勇気を与えることに顕著な業績があった」〔日本サッカー協会, 2011(329)：14〕として、国民栄誉賞が受賞された。それに加えて、女子代表は、再び2012年第30回ロンドンオリンピック(イギリス)にて銀メダルを獲得した。また、2013年EAFF女子東アジアカップ(韓国)にて2位となり、2014年第17回アジア大会(韓国)にて準優勝の成果を上げた。このような女子代表の活躍の影響より、リーグ自体を後援する大型企業や各チームを援助する地元の企業が増えた。ゆえに、リーグ事務局は、リーグ予算が例年より倍増したことを契機にして、新たな事業計画を構想し始めた〔読売新聞, 2011.09.17・2011.10.15〕。

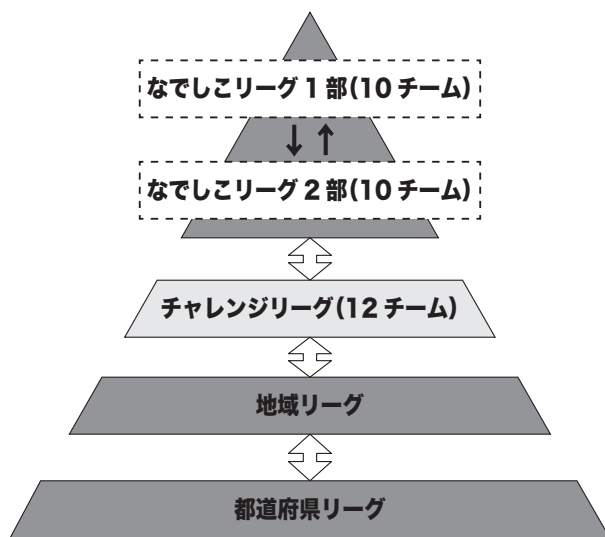
3-3 第三期：2015～2018——3部制

このように、リーグ事務局は既存のリーグ形式を変化しつつ、2014年3月に2部制のリーグ体制を、2015年シーズンからは3部制に拡張することを発表した〔読売新聞, 2014.03.18〕。つまり、リーグ事務局は「なでしこリーグ1部・2部」「チャレンジリーグ」といった3部制にリーグ体制を改革し、1・2部は10チームずつ、チャレンジリーグはEAST／WEST各6チームにして、計32チームがリーグに加盟できるように取り組んだ。なお、「1部には普及を含めてサッカー活動に専念できる選手が3人以上いることを義務づけ、試合や練習時のケガの治

療費をチームが負担し、15歳以下のアカデミーチームを保有することなど」[産経スポーツ, 2014.03.18], リーグ再編成と並行して, 新たにガイドラインも策定した。こうしてリーグ体制の変化が見られる中で, 女子代表が2015年の第7回FIFA女子ワールドカップ(カナダ)にて準優勝という再び好成績をあげた。この大会まで3連続決勝に進んだ女子代表によって, 女子サッカーは将来性の高い競技として人びとに注目を寄せるようになった。

しかしながら, 女子代表が2016年の第31回リオデジャネイロオリンピック(ブラジル)への出場権を逃してしまったことで, 女子代表のマンネリ化や実力不足についてメディアで取り上げられたこともあった[Cycle, 2016.03.10; Sportiva web, 2018.04.06]。こうした中, 女子代表は2018年のアジアカップ(ヨルダン)にて優勝を果たし, 2019年開催される予定の第8回FIFA女子ワールドカップ(フランス)の出場権を獲得している。これらのことで, 低迷しているように見えた女子サッカー界に改めて希望を期する声が多くなっていると思われる。

以上, ここまで概況してきたように, リーグ事務局は女子サッカーの普及と選手の育成, 代表強化などを目的にして, リーグをめぐる様々な事業を進めてきたことがわかる。ここで指摘しておきないのは, リーグ体制が「トップダウン方式」で再編成され続けてきた点である。つまり, リーグ事務局が大きく女子代表の大会結果やリーグ自体の予算に依存しながら, リーグを拡張したり再編成したりする方法で, リーグ運営に務めている点である。



※チーム数は変更の可能性あり

図3. 2015年以降 リーグ構想 [日本女子サッカーリーグ, 2014より]

4 リーグ拡張によるチームの運営難

このようにリーグが拡張され, リーグの発展が見られる一方で, 現場で浮上してきた女子サッカー界の課題が大きく二点ある。ひとつは, チームの運営資金不足であり, もうひとつは選手の生活上の経済的困難である。言い換えると, 日本女子サッカー界は, 制度レベルでは大きく成長し発展しているかのように見えるが(表3), 現場レベルでは経済的に不安定な状況が続いているのである。このような逆説的な現状がなぜ起きているのだろうか。

表3. 加盟チームの一覧 [輪田ら2012aを参考に筆者作成]

																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					</
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----

4-1 現場レベルの経済的困難をめぐって

それについて確認するために、現場のチームと選手が経済的にどのような問題に直面してきたかを考察していきたい。具体的に、現場レベルの経済的困難について、メディアによって取り上げられてきた内容を紹介する。

まず、チームの運営資金不足の実態は、大きく二つに分けて記述する。第一に企業チームの廃部、第二に支援打ち切りと支援企業の不在、である。当然なことを述べるかもしれないが、チームの運営難は、選手の生活を不安定にさせてしまうような、競技環境悪化と収入面での不安を生み出すものとなっているからである。

(1) チームの運営資金不足の実態

現場レベルの経済的困難に関する例として取り上げられるのは、第一に企業チームの廃部である。1993年、「日産FCレディース」は親会社にあたる日産自動車の業績悪化を理由に、チーム廃部及びリーグ退会を表明した〔朝日新聞, 1993.12.16〕。また1998年リーグを限りに、経費削減のため「日興証券女子サッカー部ドリームレディース」「フジタサッカークラブ・マーキュリー」「シロキFCセレーナ」「鈴与清水FCラプリーレディース」がリーグから撤回し^⑦、チームは廃部された〔朝日新聞, 1998.10.04〕。また「OKI FC Winds」も経済的不況の影響で1999年リーグを限りに退会した〔日本女子サッカーリーグ, 2000(77)〕。2008年には、「TASAKIペルーレFC」が女子代表の選手も所属しているほどの名門チームであったが、母体企業の深刻な業績悪化によってチームが休部となり、来期からリーグを退会すると発表した〔朝日新聞, 2008.10.11〕。

第二は、支援打ち切りと支援企業の不在である。たとえば、2000年から「プリマハム・FC・くノ一」や「松下電器パナソニックバンビーナ」という企業チームがクラブチームへ移管せざるを得なかった事例が取り上げられる。「プリマハム・FC・くノ一」は、親会社のプリマの撤退で廃部となり、「伊賀フットボールクラブくノ一」というチーム名で再出発を図った。母体企業のプリマ側は「練習場のほか、クラブハウス、寮の継続使用を期限付きで認め」たが、それでもチーム自体の運営へのめどは立っていなかったという〔読売新聞, 2000.01.26〕。「松下電器パナソニックバンビーナ」は、女子サッカーチームの年間7千万円以上の運営費が母体企業の経費削減の対象になったため、結局廃部となってしまった。そこで、このチームは「スペランツァFC高槻(現、コノミヤスペランツァFC大阪高槻)」に移管して選手の会費と、地元・協会が中心になって小口の後援会員を募り、チームを運営することになった〔朝日新聞, 2000.08.02〕。また「宝塚バニーズレディースサッカークラブ」は、1995年度からリーグに加盟し、選手全員をプロ選手として雇用していた企業チームであった。だが、このチームの母体企業は、1999年から選手に仕事を果たせざるを得なくなった。よって、選手は夕方まで働いた後、練習をするという生活を過ごさなければならなくなった〔朝日新聞, 1999.10.06〕。

なお、元々クラブチームからスタートしたチームでも、支援企業の不在で苦労しているものも見られる。たとえば「岡山湯郷Belle」は、メイン支援企業の不況により、年間収入約1千万円が減収となった。このチームでは、運営難を乗り越えるために「ホームゲームで無料配布するプログラムを印刷業者に依頼していたが、スタッフの手作りにするなど」の運営経費の削減に努めつつ、後援会の入会会員と支援企業募集に働きかけざるを得なかった〔読売新聞, 2009.05.13〕。さらに、2015年7月にトップリーグに所属する「スペランツァ大阪高槻」は、

元支援企業の破産の影響で同年12月までの運営資金が3千万円不足していると、メディアを通して発表した。このチームは「選手や監督、スタッフへの報酬金が約2カ月未払いになっており、資金が集まらなければリーグ撤退の可能性もある」と、リーグや支援企業、地元のひとに知らせて後援を求めた〔朝日新聞, 2015.07.31〕。このように女子サッカーは、母体企業の経済的事情によって経費削減されやすい、廃部されやすい種目であると思われる。

(2) 選手の生活上の不安定性

なおのこと、こうしたチームの運営難は、選手の生活上の不安定さにつながってしまう。それは、選手にとっての競技環境悪化と収入面での不安として表れる。なぜならチームが廃部されると、選手は移籍先を探さなければならなくなるし、収入源もなくなるからである。

ここで、吉泉愛選手の事例〔朝日新聞, 1999.04.09〕を紹介する。彼女は、移籍した3チームとも廃部になってしまうことを経験した。吉泉選手が、最初に入団したチームは日産FCレディースであった。その後、TOKYO SHIDAX LSCに移ったが、2年後にこのチームも廃部となった。再び、フジタサッカークラブ・マーキュリーに移ったが、このチームも3年後の1998年リーグ後に解散となった。そのあげく吉泉選手は、リーグの加盟チームに所属したいというこだわりを捨て、地域の下部リーグで活動することにしたという。また、目時淳子選手の事例〔朝日新聞, 1999.10.06〕も記述しておく、目時選手も吉泉選手と同様に、最初に入団したチームは日産FCレディースであった。そのチームの廃部後、フジタサッカークラブ・マーキュリーに移籍したが、また廃部になってしまった。目時選手は、リーグの加盟チームには残ることを選択し、浦和レイナスFCに移籍した。

このように、吉泉選手と目時選手は、相次ぐチームの廃部によって、所属チーム自体の存続をめぐって不安を感じながら、サッカーをすることになった。つまり、吉泉選手が「あと1年プレーできたら、もっと力を出せたのに」〔朝日新聞, 1999.04.09〕と語っているように、チームの廃部というのは、選手にとって競技力向上に妨げると同時に、サッカーキャリアも中断させる。大松真由美選手[®]〔朝日新聞, 1998.11.05〕は、移籍先の受け皿が少ない点を言及し、選手のキャリアが途切れてしまう恐れがある点に不安がっていた点も確認できる。

なおかつ、この選手らは、移籍とともにプロ選手からアマチュア選手に逆戻りしたものであった。ということは、彼女らはサッカーだけでは収入を得ることができなくなったことを意味する。つまり、働いて生活費を稼ぎながら、サッカーをしなければならなくなった。さらに、選手らがサッカーに関係のある仕事に就くことは、現実的ではなかった。他方で、太田麻紀選手が「選手として採ってくれるチームがあれば、アルバイトでも何でもするつもりだ」〔朝日新聞, 1996.03.18〕と語っているように、彼女らは別の仕事をしてでも、サッカーを続けようとした。そのため、多くの選手がスーパー、教員、ホテル、工場、喫茶店、スポーツジム、本屋などで仕事をしながらサッカーに携わるようになったといえる。

しかし、ここで見逃してはならないのは、選手らにとっては、働きながらサッカーの実力も伸ばさなければならないという点である。たとえば選手は限られている時間内に、収入を増やせたいならば、練習時間を減らさなければならなかった。逆に、選手が練習時間を増やせたいならば、働く時間を少なくしなければならないゆえに、午後2時まで仕事をしてから練習に参加する選手もいた〔朝日新聞, 1999.04.09・1999.10.06〕。また、伊賀フットボールクラブクノエでは、選手の要望でチームの練習開始を1時間早めたが、選手が練習のために仕事の

時間を削ることで、収入が減った選手もいた〔朝日新聞, 2008.04.12〕。さらに、収入も練習時間もいずれも確報したいならば、朝早くから仕事をはじめるとはなかった^⑨。それは選手にとって身体的に過酷であることと考えられる。こうした日々は、選手の競技環境悪化や収入面での不安を増すものだからである。つまり、プロ選手になれない選手らは、サッカーを取るべきか、収入を取るべきかという選択まで迫られていたのである。

以上のように、チームの運営難は、選手の移籍やアマチュア選手への逆戻りにつながってしまった。端的に言えば、アマチュア選手が多いのは、プロ選手として契約できる運営資金がチームにはないからである。よって、選手のほとんどがサッカーを続けたいなら、仕事の掛け持ちをせざるをえなくなった。こうした現状は、表4から確認できるように、女子代表レベルの選手でも、別の仕事をしている点が見られる。これは、2011年の第6回FIFA女子ワールドカップ（ドイツ）で優勝して以来、現在も続いている現象である〔日本サッカー協会, 2011:14-15；NEWSポストセブン, 2015.07.09〕。すなわち、「女子サッカー選手＝経済的困難」と言った選手の生活上における経済的位相をめぐる議論は、2019年の今も継続されているのである。

表4. 女子サッカー日本代表選手の職業（2004五輪）〔朝日新聞, 2004.05.24より〕

ポジション	氏名（年齢）	所属チーム	職種
G K	山郷のぞみ（29）	さいたまレイナスFC	高校職員
	小野寺志保（30）	日テレ・ベレーザ	ヴェルディアルバイト
D F	大部由美（29）	YKK東北女子サッカー部フラッパーズ	YKK勤務
	磯崎浩美（28）	TASAKIペルーレFC	田崎真珠社員
	宮崎有香（20）	伊賀フットボールクラブくノ一	天理大学3年
	山岸靖代（24）	伊賀フットボールクラブくノ一	プリマハム準社員
	矢野喬子（19）	大学チーム	神奈川大学2年
	下小鶴綾（21）	スペランツァFC高槻	関西大学4年
M F	酒井與恵（25）	日テレ・ベレーザ	ヴェルディアルバイト
	小林弥生（22）	日テレ・ベレーザ	接骨院アルバイト
	安藤梢（21）	さいたまレイナスFC	筑波大学4年
	川上直子（26）	TASAKIペルーレFC	田崎真珠社員
	山本絵美（22）	TASAKIペルーレFC	田崎真珠社員
	柳田美幸（23）	TASAKIペルーレFC	田崎真珠社員
	宮本ともみ（25）	伊賀フットボールクラブくノ一	専業主婦
F W	荒川恵理子（24）	日テレ・ベレーザ	スーパーアルバイト
	永里優季（16）	日テレ・ベレーザ	高校2年生
	丸山桂里奈（21）	大学チーム	日本体育大学4年
	大谷未央（25）	TASAKIペルーレFC	田崎真珠社員
	澤穂希（25）	日テレ・ベレーザ	プロ契約

4-2 トップダウン方式のリーグ拡張とチームの運営方法

ここまで述べてきたように、女子サッカーをめぐって特化している課題は、現場自体の経済的困難であった。それでは、現場レベルでの困難を念頭に入れた上で、リーグ拡張が現場にとってどのような意味を持つのか、リーグ拡張とチームの運営難との関係性を探ってみよう。

リーグ拡張が始まった時期は、リーグの不況期によってリーグの存続自体が危惧的であった以来からだと考える。不況期の当時のリーグ事務局は、リーグへ加盟してくれるチームを募集しつつ、費用のかけないリーグとチーム運営ができるように努めていた〔日本女子サッカーリーグ, 1998: 3〕。緊縮策の結果、2003年までに13チームをリーグの加盟チームとして確保することができた。その上で2004年には、14チームを8・6チームに分けて2部制のリーグを開幕することも可能になった。

ところが、加盟チームの量的な増加が見られるとはいえ、それがチームの運営面での安定を表しているのだろうか。むしろ、不況期に残れたある企業チームでは、周りの相次ぎ廃部されていくチームをみていた。そのため、女子サッカーへの後援が企業の経済的危機へつながる恐れがあるものと噂が先に立ってしまい、会社からの支援が節減された場合もあった〔東明ら, 2003〕。

また、すでに述べたように、企業チームがほとんど撤退した現在、多くのチームは巨額の資金ではなく、地元の企業や自治体、人びとの後援金より運営難を抱えながらチームの経営をしている。つまり、リーグ自体は存続の危機を克服しているように思われるものの、チーム自体の運営難はなくなっていない。それを表しているのは、2015年、なでしこリーグ1部所属のスペランツァ大阪高槻が、メディアを通して資金援助をリーグや支援企業に求めた事例であろう〔日本経済新聞, 2015.07.30〕。このように、女子サッカー界において、名門チームでさえ、運営難に陥っているのが現実である。なぜ女子サッカーは、リーグ体制が大きくなったにもかかわらず、チームの運営難は改善されず、逆に加重してしまったのだろうか。

当然なことを言うかもしれないが、リーグが拡張されると、以前より多くのチームがリーグに加盟することになる。すなわち、それはチーム相互間の優勝争いが激しくなり、チームごとの試合数が増えることで運営費がいつそうかかることを意味する（表5）。それゆえに、リーグ拡張ということは、チーム側にとって大きく二点の負担が重荷になるものと考えられる。それは「チームの競技力向上への負担」と「運営資金確保への負担」であろう。言い換えれば、運営資金が豊富であれば、多くのトップレベルの選手とプロ契約を結ぶことで、競技力を向上することができる。だが、女子サッカーチームの場合は、運営資金それ自体が不足しているため、プロ選手を獲得することができず、競技力向上を図ることは難しくなる。

たとえば、上記に述べたように、1990年代に活動したいくつかの企業チームは、これらの負担に耐えることができず、リーグを退会した。なおのこと、リーグ優勝を連覇してきたチームさえ、チームへの支援企業がなくなり、チームが急きょ廃部されることもあった〔朝日新聞, 1998.11.05〕。こうして、チームでは「運営難＝廃部」と認識するようになり、選手らも急に居場所を失うのではないかという不安を抱える。したがって、チームでは、常に費用のかからない運営方法、つまり緊縮的に運営をしながら、資金集めのために支援企業を探し続けていると言える。

表5. 各リーグにおけるチームの試合数と日程

年度	回数	チーム数	試合数（1チーム当たり）		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
			リーグ戦	リーグカップ												
↓ 1 部制																
1989	第1回	6	10	－											1989.9.9～1990.1.28	
1990	第2回	6	15	－							1990.4.21～1991.1.27					
1991	第3回	10	18	－							1991.6.22～1992.2.9					
1992	第4回	10	18	－							1992.6.6～11.15					
1993	第5回	10	18	－					【前期】 1993.5.2～6.27					【後期】 1993.10.3～11.28		
1994	第6回	10	18	－					【前期】 1994.5.22～7.17					【後期】 1994.10.3～12.4		
1995	第7回	10	18	－								【前期】 1995.8.17～10.22	【後期】 1995.11.5～12.24			
1996	第8回	10	18	4					【カップ】 1996.6.2～6.30			【前期】 1996.8.18～10.13	【後期】 1996.10.27～12.22			
1997	第9回	10	18	4					【カップ】 1997.4.20～5.5	【前期】 1997.6.29～8.24	【後期】 1997.9.14～11.16					
1998	第10回	10	18	4			【カップ】 1998.3.7～3.29		【前期】 1998.4.25～8.9	【後期】 1998.9.6～11.8						
1999	第11回	8	14	－							【前期】 1999.7.18～9.19	【後期】 1999.10.2～12.12				
2000	第12回	9	1次リーグ：東日本2000.7.4～7.14	－						【1次リーグ】 東日本2000.7.2～9.24				【決勝リーグ】 上位2000.11.5～12.9 下位2000.11.5～12.3		
			決勝リーグ：上位6・下位4						【1次リーグ】 西日本2000.7.1～10.1							
2001	第13回	10	1次リーグ：8	－					【1次リーグ】 東日本2001.5.13～7.29				【決勝リーグ】 上位2001.9.2～11.4 下位2001.9.2～10.8			
			決勝リーグ：上位6・下位5						【1次リーグ】 西日本2001.5.13～7.29							
2002	第14回	11	1次リーグ：東日本2002.7.4～7.14	－						【1次リーグ】 東日本2002.7.2～8.4			【決勝リーグ】 上位2002.10.27～11.30 下位2002.10.27～12.1			
			決勝リーグ：上位6・下位6						【1次リーグ】 西日本2002.7.4～8.4							
2003	第15回	13	1次リーグ：東日本2003.4.6～9.7	－						【1次リーグ】 東日本2003.4.6～9.7	【決勝リーグ】 上位2003.10.19～12.21					
			決勝リーグ：上位10・下位6						【1次リーグ】 西日本2003.5.11～9.7	【決勝リーグ】 下位2003.10.9～11.30						

年度	回数	チーム数	試合数（１チーム当たり）		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
			リーグ戦	リーグカップ												
↓ ２部制																
2004	第16回	L1：8	14	-									[L1/L2] 2004.6.13～10.31			
		L2：6	15													
2005	第17回	L1：8	21	-									[L1] 2005.4.9～11.3			
		L2：7	18										[L2] 2005.4.10～11.3			
2006	第18回	D1：8	21	-									[DIVISION1] 2006.5.21～11.4			
		D2：8	21										[DIVISION2] 2006.5.21～11.5			
2007	第19回	D1：8	21	3									[DIVISION1] 2007.4.28～12.9 【カ ッ プ】 2007.9.2～9.17			
		D2：8	21	3									[DIVISION2] 2007.4.29～11.8 【カ ッ プ】 2007.9.2～9.17			
2008	第20回	D1：8	21	-									[DIVISION1] 2008.4.12～11.23			
		D2：9	16										[DIVISION2] 2008.4.13～10.26			
2009	第21回	D1：8 D2：8	21 21	- -									[DIVISION1/DIVISION2] 2009.4.11～11.1			
2010	第22回	な：10	18	4									[なでしこリーグ2010] 2010.4.4～10.31 【カ ッ プ】 2010.7.10～8.8			
		チャ：12	15	-									[チャレンジリーグ2010 EAST/WEST] 2010.4.4～9.19			
2011	第23回	な：9	16	-									[なでしこリーグ2011] 2011.4.29～11.20			
		チャ：12	15	-									[チャレンジリーグ2011 EAST/WEST] 2011.4.10～9.25			
2012	第24回	な：10	18	4									[なでしこリーグ2012] 2012.4.15～11.11 【カ ッ プ】 2012.6.23～8.26			
		チャ：12	22	-									[チャレンジリーグ2012] 2012.4.8～11.4			
2013	第25回	な：10	18	8									[なでしこリーグ2013] 2013.3.23～11.10 【カ ッ プ】 2013.5.25～8.18			
		チャ：16	22	-									[チャレンジリーグ2013] 2013.4.7～9.22			
2014	第26回	な：10	レギュラーシリーズ：18 エキサイトینگリーグ：上座0、下座	-									[なでしこリーグ] レギュラーシリーズ 2014.3.29～8.17			
		チャ：16	22	-									[なでしこリーグ] エキサイトینگリーグ上座下座 2014.3.31～11.24			
				-									[チャレンジリーグ] 2014.4.5～11.3			

年度	回数	チーム数	試合数（1チーム当たり）		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
			リーグ戦	リーグカップ	↓ 3部制											
2015	第27回	な1：10	レギュラーシリーズ：18	－	【なでしこリーグ1部】 レギュラーシリーズ 2015.3.28～9.27											
			エキサ/ティンダ/リーグ：上・下・臨												【なでしこリーグ副】 エキサ/ティンダ/上・下・臨 2015.10.0～11.8	
		な2：10	27	－	【なでしこリーグ2部】 2015.3.28～11.3											
		チャ：12	15	－	【チャレンジリーグ】 EAST/WEST 2015.4.4～9.21											
2016	第28回	な1：10	18	8	【なでしこリーグ1部】 2016.3.26～10.23 【カップ】 2016.6.4～8.7											
		な2：10	18	8	【なでしこリーグ2部】 2016.3.26～10.16 【カップ】 2016.6.12～8.14											
		チャ：12	EAST/WEST：15・順位決定戦：3	－	【チャレンジリーグ】 EAST/WEST 2016.4.10～7.24											
					【チャレンジリーグ】 順位決定戦 2016.8.27～9.11											
2017	第29回	な1：10	18	8	【なでしこリーグ1部】 2017.3.26～10.7 【カップ】 2017.4.8～7.30											
		な2：10	18	8	【なでしこリーグ2部】 2017.3.25～10.7 【カップ】 2017.6.3～8.6											
		チャ：12	EAST/WEST：15・順位決定戦：3	－	【チャレンジリーグ】 EAST/WEST 2017.4.16～7.23											
					【チャレンジリーグ】 順位決定戦 2017.9～9.30											
2018	第30回	な1：10	18	8	【なでしこリーグ1部】 2018.3.21～11.3 【カップ】 2018.3.31～7.21											
		な2：10	18	8	【なでしこリーグ2部】 2018.3.21～10.28 【カップ】 2018.4.1～7.16											
		チャ：12	EAST/WEST：15・順位決定戦：3	－	【チャレンジリーグ】 EAST/WEST 2018.4.15～8.5											
					【チャレンジリーグ】 順位決定戦 2018.9～9.15											

※2011年、東日本大震災と福島第一原発事故の影響で「東京電力女子サッカー部マリーゼ」の活動は休止となった〔朝日新聞、2011.08.23〕。

※リーグカップの試合数は、リーグごとの各加盟チームが参加した場合のみの合計である。決勝戦などは試合数は除外した。

よって、リーグ拡張というのは、チームにとってより多くの運営資金が必要になることを意味するゆえに、それはチームの運営負担にもつながると思われる。たとえば、1部リーグの分担金の例から見てみると、リーグの好況期には735万円であった分担金が〔読売新聞, 1999.11.12〕, 不況期に入ると、チームの事情を踏まえ150万円に分担金下がっていた〔読売新聞, 2004.12.04；朝日新聞, 2018.03.07〕。その後、2009年には350万円に〔日本女子サッカーリーグ, 2009〕, 2012年から2014年の間は450万円〔輪田ら, 2012b；日本女子サッカーリーグ, 2013〕に、2015年からは500万円と〔産経スポーツ, 2014.03.18〕, リーグ拡張とともにその金額も続々値上がりした。ところが、チームの経済的状況も、リーグの分担金の増額水準に合わせられるほど豊富であるといえるのだろうか。多くのチームでは、それを支払うために、さらに多くの運営資金を集めなければならなくなる。

こうした中で、チームはどのようにして運用資金を得ているのだろうか。一昔の企業チームでは、試合経費やスタッフ・選手への人件費、リーグの分担金など、1シーズン当たり1億から2億円を超える運営資金がかかっていたという〔朝日新聞, 1998.11.05；2000.02.26〕。ということは、スタッフと選手全員の人件費だけの予算として、おおよそ1億円以上が必要になることがわかる。しかし、現在の多くのチームでは運営資金自体が不足しているため、選手をプロ選手として雇用することすら難しく、スタッフや選手に人件費を支払う資金の余裕がない。よってチームでは、選手への人件費を払う代案として、彼女らに人件費を直接支払ってくれる支援企業を募集して、それ以外の経費のみを集める形で運営方法を設けているのである。このように、チームの支援企業募集への大きな目的は、「運営資金集め」だけではなく「選手への就労斡旋」のためでもある。また選手は、こうしたチームの働きにより、サッカーをしながら、仕事を通して生計を立てるようになる〔申, 2017〕。

ところで、リーグ拡張による優勝争いが深化する中で、チームがそこで生き残るためには、競技力向上に貢献できる選手を獲得しなければならない。ゆえに、あるチームでは、アマチュア選手だけでは競技力向上を図ることが難しいと判断し、わずかな人数でもプロ選手を雇用しようとする。しかし、これはスペランツァ大阪高槻の事例からも推測できるように、運営資金がないにもかかわらず、競技力向上のために、チームが専任・常住スタッフやプロ選手を雇用していることが考えられる。その結果、女子サッカーチームにおいて、同じチーム内にプロ選手、アマチュア選手が混在している場合も多々見られ、なおかつ多様な雇用形態をもつ選手がそれぞれの生活形態を持って活動している点がうかがえる。

こうした女子サッカーの特徴は、いっそうチーム相互間の支援企業募集への争いにつながると思われる。なぜなら、選手の立場からすると、プロ契約を交わしてくれるチームが少ないなら、より良い仕事環境を提供してくれるチームで活動したがるからである^⑩。つまり、女子サッカー界では社会人選手なら、仕事をしながらサッカーをする生活を当然視するため、選手からすると、より良い仕事環境を求めたくなるのである。したがって、チームでは、好のアマチュア選手を獲得するために、選手がサッカーに集中することができる仕事環境や、選手へ生活費を支払える支援企業を探さなければならなくなった。ゆえに、チーム相互間における支援企業募集への争いは、以前より激しくなっていると思われる。そのため、現場の事情を視野に入れずにおこなわれるリーグ拡張は、現場レベルの経済的困難を加重させる原因になり兼ねないという点を指摘しておきたい。つまり、現場にとってのリーグ拡張というのは、チームの運営難を継続させるものとして解釈されがちであるといえる。

それに、リーグ事務局は各チームに対して、競技力向上とともに、サッカー教室やイベントなどの競技普及も求めている。これらの開催は、競技普及につながる可能性はあるが、これを主催するチームでは、運営経費がより増すことになる。とくにサッカーのみではなく、別の仕事もしなければならぬアマチュア選手において、こうしたイベント活動は、身体的にも時間的にも大きな負担となるだろう。なぜなら競技普及への責任も背負わなければならない選手らは、これらによって休みが少なくなるため、疲労が過重し、選手の身体管理面ではマイナスに作用するかもしれないからである。

以上のように、本稿では、現場の立場を考慮しないトップダウン方式のリーグ拡張が、試合自体や競技普及によるチームの運営経費の負担増加、チーム相互間の支援企業募集への競争化、各チームにおける好選手獲得への困難、選手の疲労過重および競技環境悪化を招来するかもしれない点を指摘してきた。このように、リーグ拡張は現場レベルの運営難を継続させるものとして表れる点もあるため、その批判的に再考する作業を本稿で試みたのである。

5 おわりに

本稿は、リーグ自体の発展が必ずしも現場レベルの発展につながらない点を、リーグ体制の歴史化と現場レベルの経済的困難に焦点を合わせて明らかにしたものである。ここでは、日本の女子サッカーにおいて、リーグ拡張と現場の発展が比例関係ではないことを述べ、リーグ拡張自体が現場の経済的困難を継続させている点を指摘した。

リーグ事務局は、現場のチームと選手が経済的困難を抱えている中で、その事情を念頭に入れてリーグを運営するより、女子代表の大会結果とリーグ自体の予算に頼りつつ、リーグを拡張させる場合が多かった。ところが、こうしたトップダウン方式のリーグ運営方法は、チームの運営力アップには直決しなかった。かえってチームでは、リーグに生き残るため、常に運営経費の切り詰めなければならなくなった。また、それは選手の競技環境悪化や収入面での不安を生み出す結果としても表れた。こうしてチームの運営難は続き、選手の経済的待遇も改善されていない状況である。トップレベルの選手でさえアマチュア選手が多いのは、こうした理由からだと考えられる。

さらに、チームの運営難は女子チーム間の競技レベルと運営力の格差〔田口, 2009〕も生み出す。なぜなら、アマチュア選手が多く所属するチームがほとんどである一方で、チームの運営資金によっては選手全員がプロ選手であるチームもあるからである。このように、チーム相互間の格差が存在しているといえる〔日刊スポーツ, 2013.10.09〕。

チームの運営資金がなければ、好選手を採用することもできない。なおかつ、第2章で述べたように、女子サッカーは、ジェンダー化が見られる種目であるため、男子チームより資金を集めるのが難しい点もあると思われる。こうしたチームの運営難の中で、競技力向上も図らないといけないうチームでは、いつ廃部されてもおかしくない状況に陥ってしまう恐れもある。また、いつ支援企業から後援が打ち切られるか予見できないことから、チームと選手両方とも不安を感じてしまうことになる。これに加えて、リーグ自体までトップダウン方式で拡張されると、チームの運営難はいっそう厳しくなる。よって、女子サッカー界は、経済的に不安定な状況が継続しているのであろう。

なお、これら以外に、女子サッカーの課題として男子サッカーとの格差 [NEWSポストセブン, 2015.07.09], 少女女子の競技人口数の確保, 女性指導者の育成 [読売新聞, 2016.06.09], 中学校チームの不足 [前田・川西, 1994], 私立大学女子サッカー部の創設への必要性 [石山, 2018] など問題視されてきた。しかしながら、女子サッカー界の不安定な要素を解決せずに、女子サッカーの人口だけを増やす営みは、今のリーグ所属の選手らが抱える困難を少女女子へそのまま引き継がせることにほかならないと考える。

最後に、本稿では、チームの運営資金さえ確保できれば、女子サッカー界をめぐる様々な課題が解決できるという点を、言いたいわけではない。もちろん、経済的支援という課題を改善するのも重要であるが、本稿で示唆したい点は、トップダウン方式のリーグ拡張が現場レベルの経済的困難を加重させている点である。つまり、制度レベルを中心にした「協会・リーグ事務局／現場」といった上下関係や主従関係が、女子サッカー界の脆弱性を強化している点を指摘したいのである。このせめぎ合いが、リーグ事務局とチームの互いを相互不信にさせたり、女子サッカーの競技人口の増加を妨げたりするのではないか、その点も言及しておきたい。リーグ拡張というのが、誰のための改革であるのかについて再考する必要性を浮上させることが本稿の意義であると思われる。

【注】

- ①日本サッカー協会ホームページを参照。
- ②「Japan Ladies Soccer League」という英語表記は、1989年から1995年まで使われていた。1996年から「Japan Women's Football League」へ変更となった。
- ③Japan Knowledgeホームページよりプログレッシブ英和中辞典を参照・引用。
- ④この経緯は、1993年男子のプロサッカーリーグの設立とともに、「Jリーグ」という愛称が名付けられた。1989から1994aの間には、リーグの略称として「JLSL」という言葉が用いられた。これは日本女子サッカーリーグの英語表記であるJapan Ladies Soccer Leagueの頭文字から採択したものであった。
- ⑤女子代表は第28回アテネオリンピックの出場権を獲得できた。約2,700通の応募の中から「なでしこジャパン」という愛称が決定され、2004年7月7日に日本サッカー協会にて女子代表の愛称発表がおこなわれた [日本女子サッカーリーグ, 2004 (130) : 5]。
- ⑥「新方式は、10チームの2回総当たりによるレギュラーシリーズ (RS, 仮称) を行い、上位6チームが2回総当たりの『エキサイティング・シリーズ (仮称)』を戦って年間優勝を決める。下位4チームも同様の対戦方式で残留を争う。リーグ杯は廃止される」 [読売新聞, 2013.11.13より引用]。
- ⑦「シロキFCセレーナ」と「鈴与清水FCラブリーレディース」は、「リーグ運営に賛同できない」 [日本女子サッカーリーグ, 2000 (77) : 3] という理由もあってリーグ退会を表明したと書かれてある。
- ⑧日興證券女子サッカー部ドリームレディース所属の選手であった。このチームは1998年に廃部となった。
- ⑨生計も立てながら、練習時間もより多く確報するために、朝6時半からコンビニでバイトをする選手も見られる [朝日新聞, 2000.08.02]。
- ⑩筆者がフィールド調査をおこなったデータで補足すると、KチームのVさんも移籍先を選ぶ条件として、支援企業への就労斡旋をしっかりとってくれるかどうかを取り上げられたまたOチームののぞみさんも、いくつかの移籍先の中でOチームを選んだ一番の理由として、勤務時間が他チームより短かったためだと語っていた。

【参考文献】

- Edwards, E., 2014, "Fields of Individuals and Neoliberal Logics: Japanese Soccer Ideals and the 1990s Economic Crisis", *Journal of Sport and Social Issues* 38(5), 432-464
- Hong, E.H., 2012, "Women's Football in the Two Koreas: A Comparative Sociological Analysis", *Journal of Sport and Social Issues* 36(2), 115-134
- 飯田貴子・熊安貴美江・來田京子編著, 2018, 『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房
- 石山隆之, 2018, 『強く、しなやかな女性を育てる——学園型地域総合スポーツクラブ+文字女子サッカーの挑戦』, 徳間書店
- 前田博子・川西正志, 1994, 「女子サッカー選手のスポーツキャリアパターン——日本女子サッカーリーグ選手について」, 『鹿屋体育大学学術研究紀要』12, 41-48
- 日本サッカー協会75年史編集委員会, 1996, 『財団法人日本サッカー協会75年史——ありがとう。そして未来へ』, 財団法人日本サッカー協会
- 大住良之・大原智子, 2004, 『がんばれ！女子サッカー』, 岩波書店
- 申恩真, 2017, 日本女子サッカー選手的生活形態に関する研究——支援の質的位相をめぐって, *スポーツ社会学研究*25 (2) : 71-83
- サッカーマガジン編集部, 2018, 『なでしこリーグ30年の軌跡』ベースボール・マガジン社
- 田口禎則, 2009, 「日本女子サッカーリーグの現状と将来」, 『フットボールの科学』4 (1) , 11-14
- 高藤順, 2017, 「女子サッカークラブの発展過程と社会的背景——INAC神戸のクラブマネジメントを事例に」, 『吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）』増刊号, 163-174
- 東明有美・入口豊・山科花恵, 2002, 「女子サッカーの日米比較研究（Ⅰ）——アメリカ女子サッカーの歴史と現状について」, 『大阪教育大学紀要』第Ⅳ部門51 (1) , 165-180
- ・松原英輝, 2003, 「女子サッカーの日米比較研究（Ⅱ）——日本女子サッカーの歴史と現状について」, 『大阪教育大学紀要』第Ⅳ部門51 (2) , 433-451
- 輪田真理・入口豊・井上功一・山科花恵・東明有美, 2012a, 「日本女子サッカーリーグ所属クラブの現状と展望（Ⅰ）——日本女子サッカー（なでしこ）リーグの歴史と現状」, 『大阪教育大学紀要』第Ⅳ部門60 (2) , 15-28
- , 2012b, 「日本女子サッカーリーグ所属クラブの現状と展望（Ⅱ）——浦和レッドダイヤモンズ・レディース」, 『大阪教育大学紀要』第Ⅳ部門61 (1) , 19-32
- , 2013, 「日本女子サッカーリーグ所属クラブの現状と展望（Ⅲ）——伊賀フットボールクラブ・くノーに焦点を当てて」, 『大阪教育大学紀要』第Ⅳ部門61(2), 25-39

【参考資料】

- 朝日新聞, 1993.12.16, 「日産がリーグ脱退：親会社の業績悪化／日本女子サッカー」朝刊
- , 1996.03.18, 「シダックス女子サッカー部解散（ルポ・都市の鼓動）／東京」朝刊
- , 1998.10.04, 「日興証券が女子サッカー・Lリーグ撤退：フジタも今季限り」朝刊
- , 1998.11.05, 「女子サッカーのLリーグもリストラ：日興証券、フジタ撤退」朝刊
- , 1999.04.09, 「なぜ私ばかりリストラ：移籍のたび廃部、女子サッカーの吉泉愛選手」朝刊
- , 1999.10.06, 「寒風、女子サッカー：Lリーグ選手、アマチュアに逆戻り…」夕刊
- , 2000.02.26, 「女子サッカー『鈴与清水FC』解散へ：年1億円の経費重く／静岡」朝刊
- , 2000.08.02, 「激変、女子サッカー：企業撤退、『仕事』から『趣味』に」夕刊
- , 2004.05.24, 「女子蹴球11楽坊の面：五輪戦士たちの意外な素顔」週刊
- , 2008.03.07, 「なでしこ『SOS』：リーグスポンサーが契約打ち切る／女子サッカー」朝刊
- , 2008.04.12, 「『くノー』サッカー、苦境忍んで奮戦中：伊賀FC、仕事終え夜練習／名古屋」朝刊

- , 2008.10.11, 「田崎真珠, なでしこリーグを撤退／サッカー女子」朝刊
- , 2011.08.23, 「活動休止中の東電マリーゼ：協会, 譲渡へ働きかけ／女子サッカー」朝刊
- , 2015.07.31, 「大阪高槻が支援金募集へ／女子サッカー」朝刊
- Cycle, 2016.03.10, 「<THE REAL> なでしこジャパンはなぜ輝きを失ったのか…マンネリ化を招いた危機感の欠如」<https://cyclestyle.net/article/2016/03/10/33534.html> (最終確認日2019年3月22日)
- DIAMOND ONLINE, 2013.11.01, 「“どん底”の日本女子サッカーリーグはいかにしてアメリカを圧倒するリーグに成長できたのか？」<https://diamond.jp/articles/-/43849?page=2> (最終確認日2019年3月22日)
- Japan Knowledge, <https://japanknowledge.com>
- NEWSポストセブン, 2015.07.09, 「女子サッカー選手：男子と比べてその待遇が低すぎる現状もあり」http://www.news-postseven.com/archives/20150709_334922.html (最終確認日2019年3月22日)
- 日本経済新聞, 2015.07.30, 「なでしこ, 高槻が経営危機：リーグは資金援助せず」https://r.nikkei.com/article/DGXLSSXK40716_Q5A730C1000000?s=0 (最終確認日2019年3月22日)
- 日本女子サッカーリーグ, <http://www.nadeshikoleague.jp>
- 日刊スポーツ, 2013.10.09, 「INAC神戸, 来季完全プロへ」https://www.nikkansports.com/soccer/new_s/p-script0-20131009-1201676.html (最終確認日2019年3月22日)
- 日本サッカー協会, <http://www.jfa.jp>
- , 2008, 「プレナスなでしこリーグ2008開幕——興奮と感動の花が咲き乱れる！」, 『JFA news』289, 94-95
- , 2011, 「日本女子サッカーの軌跡～世界一にたどり着くまで」, 『JFA news』328, 14-15
- , 2011, 「なでしこジャパンが『国民栄誉賞』を受賞」, 『JFA news』329, 14-15
- 日本女子サッカーリーグ, 1989, 「第1回日本女子サッカーリーグプログラム」
- , 1990, 「第2回日本女子サッカーリーグプログラム」
- , 1991, 「第3回日本女子サッカーリーグプログラム」
- , 1992, 「第4回日本女子サッカーリーグプログラム」
- , 1993, 「第5回日本女子サッカーリーグプログラム」
- , 1994, 「第6回日本女子サッカーリーグプログラム」
- , 1994, 「information Network」4
- , 1994, 「information Network」5
- , 1994, 「information Network」6
- , 1994, 「information Network」12
- , 1994, 「information Network」13
- , 1995, 「第7回L・リーグプログラム」
- , 1995, 「information Network」18
- , 1996, 「第8回L・リーグプログラム」
- , 1996, 「information Network」28
- , 1996, 「information Network」29
- , 1997, 「第9回L・リーグ公式パンフレット」
- , 1997, 「information Network」39
- , 1998, 「information Network」51
- , 1998, 「information Network」53
- , 1998, 「information Network」61
- , 1999, 「第11回L・リーグ公式プログラム」
- , 1999, 「information Network」63
- , 1999, 「information Network」65

- , 1999, 「information Network」 66
- , 1999, 「information Network」 67
- , 1999, 「information Network」 68
- , 1999, 「information Network」 70
- , 1999, 「information Network」 71
- , 1999, 「information Network」 73
- , 1999, 「information Network」 74
- , 2000, 「第12回L・リーグ公式プログラム」
- , 2000, 「information Network」 77
- , 2001, 「第13回L・リーグ公式プログラム」
- , 2001, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙87
- , 2001, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙89
- , 2002, 「第14回L・リーグ公式プログラム」
- , 2002, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙99
- , 2002, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙102
- , 2002, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙110
- , 2003, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙111
- , 2003, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙114
- , 2003, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙116
- , 2004, 「第16回L・リーグ公式プログラム」
- , 2004, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙125
- , 2004, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙130
- , 2004, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙132
- , 2009, 「日本女子サッカーリーグ規約・規定集」
- , 2013, 「一般社団法人日本女子サッカーリーグ規約・規定集」
- , 2014, 「女子チーム創設ガイド——未来の創設x女子サッカー」
- 野田一, 1995, 日本女子サッカーリーグ「第7回L・リーグプログラム」
- 産経スポーツ, 2014.03.18, 「なでしこリーグ来年から3部制に, ガイドラインも新たに策定」<http://www.sanspo.com/soccer/news/20140318/dom14031804060001-n1.html> (最終確認日2019年3月22日)
- Sportiva web, 2018.04.06, 「女子大生なでしこ2人の危機感。W杯で結果を出さねばプロになれない」https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/football/jfootball/2018/04/06/___split_23/index.php (最終確認日2019年3月22日)
- 鈴木保, 2004, 日本女子サッカーリーグ「エ・ルキューブ」123
- 竹本一彦, 2000, 日本女子サッカーリーグ『information Network』76
- 読売新聞, 1999.11.12, 「企業に頼れない! : 女子サッカーLリーグ転換期, 市民クラブ化/リーグ分割案も」大阪夕刊
- , 2000.01.26, 「女子サッカー『プリマハムFCくノ一』: 市民クラブに移行=三重」中部朝刊
- , 2004.12.04, 「女子サッカー『宝塚バニーズ』: “雑草魂”で企業チーム倒せ=兵阪神」大阪朝刊
- , 2008.09.12, 「北京五輪4位, 『なでしこ』に記念品」大阪朝刊
- , 2008.11.08, 「なでしこリーグ上位12クラブ化, 拡充案, 13年から入れ替え戦も」東京朝刊
- , 2009.05.13, 「スポンサー撤退でみんなの力を: 湯郷ベル, 月内入会会員に特典=岡山」大阪朝刊
- , 2010.01.22, 「プレナスなでしこリーグ概要発表」東京朝刊
- , 2011.03.03, 「女子リーグが一般社団法人化へ」東京朝刊
- , 2011.09.17, 「なでしこに支援続々, 公式スポンサー」東京朝刊

- , 2011.10.15, 「なでしこリーグ：トヨタ，公式スポンサーに」東京朝刊
- , 2012.03.23, 「女子リーグが補助金200万円」東京朝刊
- , 2012.05.24, 「[WOMEN] なでしこの明日（3）プレー専念できる環境に」東京朝刊
- , 2013.11.13, 「なでしこリーグ，来季はスプリット方式で」東京朝刊
- , 2014.03.18, 「女子も3部制に」東京朝刊
- , 2016.06.09, 「[論点] 女子サッカー：2020年の先へ，今井純子氏（寄稿）」東京朝刊

Precarious Female Athletes

– Analysis of Institutional System in Japanese Women's Soccer –

Eunjin SHIN

Keywords

League Expansion, Team Management Dilemma, Japanese Women Soccer Players, Precariousness

Abstract

The purpose of this study is to clarify the relationship between league expansion and difficulties in the field by conceptualizing the history of “Japan women's football league” . This paper highlights the importance of efforts to be conscious of the actual situation of the field during the process of institutional change, and attempts to explain the characteristics of Japanese women 's soccer. In order to do so, this paper objectively organized media sources such as documents about women’ s soccer, articles from newspaper and relevant institutions, and league programs. In conclusion, a top-down league expansion that does not take the situation of the field into consideration will lead to operational dilemmas in the team, such as increasing the operating cost burden of the team due to the league itself or advertising of the league, intensifying the competition among teams for private funds from the company, difficulties in acquiring competitive players, adding fatigue to players and deterioration of the playing environment. In other words, this study points out a new up-and-down 'relationship between league secretariat and the field', which is centered on the institutional level, strengthens the vulnerability of women's soccer.